

# 簡易化による被服構成の研究 (第5報)

岡 綾 子 ・ 野 津 哲 子

(被服構成学研究室)

## Studies on the Simplified Making of Japanese Style Clothing (part 5)

Ayako OKA ・ Tetsuko NOTSU

### I. 緒 言

第2報に引き続き今回は平面構成の基本ともいわれる女物長着に型紙を導入し<sup>1)</sup>肩あて居敷あての工程・留<sup>2)</sup>について試作し検討したので報告する。

### II 型紙導入法・肩あて居敷あての工程・留

#### 1) 研究方法

##### 1-A) 型紙導入法

生活の多様化に伴う教育の進展に即して初段階時の被服教育(和裁)をより容易にするには従来の慣性的方法から脱却して効果的な指導をするための便法として型紙導入を試み考察したので報告する。

#### 〔調査方法・調査対象〕

- 1 調査方法はアンケート方式を用いた。(1-Aの1-1参照)
- 2 調査対象は本学学生被服科1年生40名。
- 3 調査時期は昭和46年5月上旬。
- 4 学生各自の長着寸法を採寸と割出法により決定する。
- 5 作図法によりPaPerを用いて袖・身ごろ(半身分)・衽・衿の出来上り型紙を作製し、その型紙を活用して裁断してそれを順次組合せて構成へと進める。

##### 1-B) 肩あて・居敷あての工程

大学における被服構成学(和裁実習)のあり方は理論を基底とした科学的展開法が要望されているのが現状である。そこで今回は肩あて・居敷あての縫製法について人間工学の立場から考察を行ったので報告する。

#### 〔方 法〕

##### 居敷あての大きさと位置

#### 1 指導書調査と計測値との比較

- 計測対象者および調査時期は1-Aと同じである。  
計測方法は第11図に示す通りである。

#### 肩あて・居敷あての縫製

#### 1 多工程(指導書)と単工程(岡・野津式)の比較

- 実験対象者は1-Aと同じで実験回数は各10回。

#### 〔実験材料〕

表布…………ゆかた地  
肩あて布…………さらし木綿  
用糸…………カタン糸30番  
針および用具…………自由

#### 1-C) 留

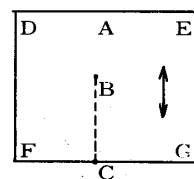
抄い返留の強度についての報告は2, 3みられるが引抜き留の強度についての報告はみられないので今回はそれと抄い留・虫留・門留・蝶留について実験をおこなったので報告する。

#### 〔方 法〕

#### 1 試料

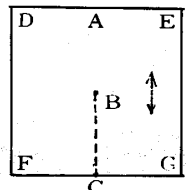
#### 第1図 試料の大きさと縫う位置

エレメンドルフ形  
引裂試験



A ~ B = 2 cm  
B ~ C = 4 cm  
D ~ E = 10 cm  
E ~ G = 6 cm

ショッパー形  
引張試験



A ~ B = 5 cm  
B ~ C = 5 cm  
D ~ E = 10 cm  
E ~ G = 10 cm

用布…………市販のゆかた地

原料綿 100 %, 厚さ0.30mm, 糸密度たて

14.9・よこ14.3 (本/cm), 糸番手たて

16.8/1・よこ19.5/1 (英国式番手)

用糸………市販の赤ダルマ手縫糸

用針………がすえりしめ

## 2. 操作方法

針目のPitchは0.3cmとし±0.1cmとした。

さき留 (A 抄い返留)

縫目方向に対し90度・45度・並行の3種。抄った針への糸かけは2回巻き1回巻きの2種。

さき留 (B 引抜き留)

当布なしで留糸1本取・2本取の2種。

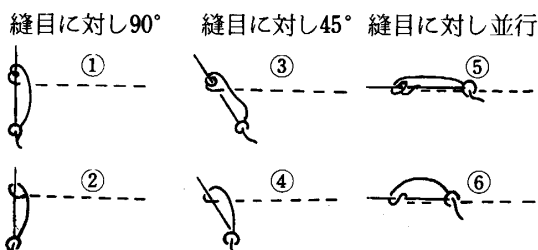
当布あり (2.0cm×2.0cm) 留糸1本取・2本取の2種。

縫目を返留としたのち、縫目に並行に折きせ山に両面より当て布をして0.2cm抄い留糸をしっかりと結ぶ。各々10回のくり返し実験である。

エレメントル形引裂試験機およびショッパー形引張試験機使用。

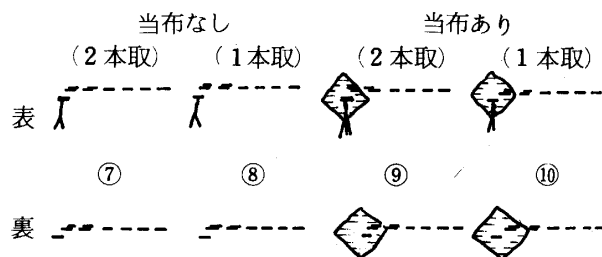
### 第2図 さき留の種類

#### A 抄い返留



### 第3図 さき留の種類

#### B 引抜き留



### 第4図 あと留の種類

#### C 虫留・門留・蝶留

##### 虫 留



①

②

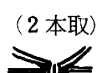
##### 門 留



③

④

##### 蝶 留



⑤

⑥



⑦

⑧

## 2) 結果および考察

### 1-A) 型紙導入法

#### 1-1) アンケート調査結果

##### ●被服構成上の理解度

女物ゆかたを製作学習した者 (中学時代) 47%。

女物ゆかたを製作学習しなかった者 (中学時代) 53%。

女物ゆかたの講義のみ学習した者 (中学時代) 30%。

女物ゆかたの講義の学習もしなかった者 (中学時代) 23%。

男物ゆかたを製作学習した者 (中学時代) 2%。

男物ゆかたを製作学習しなかった者 (中学時代) 98%。

男物ゆかたの講義のみ学習した者 (中学時代) 0%。

男物ゆかたの講義も学習しなかった (中学時代) 98%。

##### ●基礎的学習状況

運針をしたことがある 96%。

運針をしたことがない 4%。

小学時代に運針をしたことがある 94%。

中学時代に運針をしたことがある 2%。

高校時代に運針をしたことがある 0%。

##### ●各部位名称の理解度

#### △短大入学直後

袖 100 %, 袖幅95%, 袖丈 100 %, 肩幅51%, 肩ゆき46 %, 衽下り0 %, 剣先0 %, 前身ごろ63%, 衽51%, 合襟幅2 %, 前幅3 %, 衽幅7 %, 衽8 %, かけ衽5 %, 衽先4 %, 衽下3 %, 襟先0 %, 袖口下2 %, 袖丸み45 %, 袖そこ2 %, 袖ふり3 %, 肩山4 %, 衽幅65%, 衽肩あき0 %, 袖つけ4 %, 身やつ口0 %, 身丈43%, 脇43%, 後幅3 %, すそ65%, 後身ごろ65%, 背ぬい4 %, 袖山4 %, 袖口65%。

#### △短大入学後に講義・型紙製作・実物実習を学習した直後

袖 100 %, 袖幅100 %, 袖丈 100 %, 肩幅100%, 肩ゆき97%, 衽下り96%, 剣先100 %, 前身ごろ100 %, 衽98%, 合襟幅70%, 前幅73%, 衽幅98%, 衽98%, かけ衽98%, 衽先98%, 衽下77%, 襟先77%, 袖口下70%, 袖丸み98%, 袖そこ78%, 袖ふり97%, 肩山97%, 衽幅97%, 衽肩あき48%, 袖つけ80%, 身やつ口81%, 身丈89%, 脇76%, 後幅79%, すそ79%, 後身ごろ98%, 背ぬい97%, 袖山98%, 袖口96%。

以上のことから白紙の状態と短大入学後学習したあとを比較すると各項目とも後者がすぐれていることが認められる。

#### 1-2) 身長・着丈・ゆきにおける関連調査結果

●長着寸法を採寸と割出法により決定する。

身長 (cm)	着丈 (cm)	ゆき (cm)	%
143.8	→ 119.5	→ 62.0	→ 2
147.0	→ 120.0	→ 62.0	→ 6
	→ 125.0	→ 63.0	→ 6
150.0	→ 120.0	→ 62.0	→ 6
	→ 126.0	→ 63.0	→ 6
151.0	→ 132.0	→ 65.0	→ 2
152.0	→ 131.5	→ 63.0	→ 6
	→ 133.0	→ 65.0	→ 6
153.0	→ 128.0	→ 63.0	→ 2
	→ 130.0	→ 64.0	→ 2
153.5	→ 129.5	→ 65.0	→ 2
154.0	→ 128.0	→ 63.0	→ 10
	→ 132.0	→ 65.0	→ 10
155.0	→ 129.0	→ 64.0	→ 4
	→ 132.0	→ 66.0	→ 4
155.5	→ 133.0	→ 65.0	→ 6
	→ 136.0	→ 66.0	→ 6
156.0	→ 133.0	→ 67.0	→ 10
	→ 134.0	→ 65.0	→ 10
	→ 136.0	→ 66.0	→ 10
157.0	→ 130.0	→ 64.0	→ 9
	→ 133.0	→ 65.0	→ 9
158.0	→ 133.0	→ 67.0	→ 2
	→ 135.0	→ 66.0	→ 2
158.5	→ 134.0	→ 67.0	→ 9
159.0	→ 132.0	→ 66.0	→ 2
159.5	→ 135.0	→ 66.0	→ 2
161.0	→ 134.0	→ 67.0	→ 6
	→ 136.0	→ 66.0	→ 6
162.0	→ 136.0	→ 66.0	→ 6
	→ 137.0	→ 67.0	→ 6
	→ 141.0	→ 66.0	→ 6
163.0	→ 141.0	→ 67.0	→ 4
167.0	→ 141.0	→ 67.0	→ 4

以上のことから身長 155.0 cm～167.0 cmの者が全体の 64%をしめている。着丈についてみても 134.0 cm～141.0 cmまでの者が全体の約 33%をしめている。ゆきについてみると 65.0 cm～68.0 cmまでの者が全体の約 58%をしめている。即ち体位の向上がここでも顕著にあらわれている。

### 1-3) 型紙の作図法

型紙の作図に必要な部位の名称と基本寸法（出来上り寸法）を次のように定める。

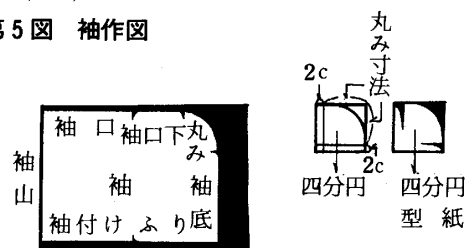
身丈 156.0 cm, 袖丈 45.0 cm, 袖口 23.0 cm, 袖つけ 22.0 cm, 袖幅 33.5 cm, 衿肩あき 8.5 cm, 身やつ口 15.0 cm, 後幅 28.0 cm, 肩幅 31.5 cm, 前幅 23.0 cm, 衿下り 23.0 cm, 衿下 78.0 cm, 衿幅 15.0 cm, 合襟幅 13.5 cm, 衿幅 5.5 cm。

#### 〔注〕

- ・型紙は半身分作製
- ・作図は模造紙を使用させ各自実習材料の幅と同寸に裁断したものを用いる。

#### 〈袖〉

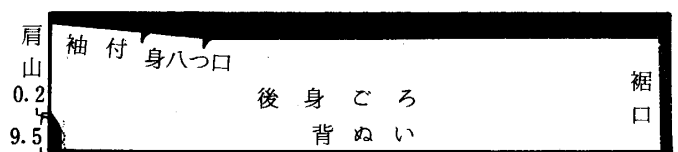
第5図 袖作図



基本寸法に従い袖丈（袖丈+折きせ 0.2 cm），袖口，袖つけ，袖口くけ代（0.7 cm），袖幅（袖幅+袖口折きせ 0.2 cm）とし，袖丸みの寸法を袖口下，袖底にとり 4 分円型紙をあてて丸み標をつける。第5図に示す通り袖口とまり，袖つけとまり，丸みのはじめと終りに境界印をつけておく。さらに不必要部分（黒い部分）を切りとり袖の型紙とする。

#### 〈後身ごろ〉

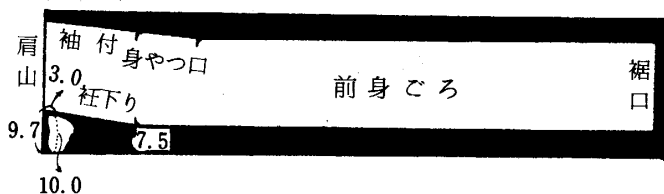
第6図 後身ごろ作図



後身ごろの基本寸法に従いすそくけ代 2.0 cm とる。裁切り衿肩あき（出来上り衿肩あき + 1.0 cm）をとり，その点より背ぬいに向ってあがり衿肩あきをとった残りを背ぬい代とする。すそ口でも背ぬい代をとって背ぬいより，後幅+脇折きせ 0.2 cm + 背折きせ 0.2 cm として標をつける。肩幅は背ぬい代より肩幅+背ぬい折きせ 0.2 cm，袖付け折きせ 0.1 cm として肩山ではかり，この肩幅と身やつ口の後幅+字標と結び袖つけとする。三つ衿ぬい代，2.0 cm をとり衿肩あきの 1/2 まで肩から水平に。衿肩あき肩山では衿肩あきより 0.2 cm はなれ三つ衿ぬい代を free に結び後衿つけ線をつくる。

## 〈前身ごろ〉

第7図 前身ごろ作図



前身ごろ、すそ口、袖つけ線、脇線は後の通りとする。

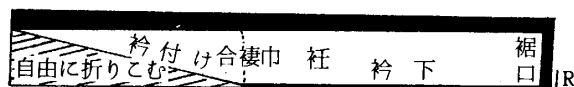
(第6図参照)

衿下り、前幅(前幅+脇折きせ 0.2 cm + 衿つけ折きせ 0.2 cm)を脇よりとる。衿下りでは衿肩あき直下線より 2.0 cm 前によせた点と前幅を結び衿つけとする。

前肩衿つけ線は肩山より 3.0 cm 前によせ衿肩あき + 0.5 cm とし、さらに衿下りの点と結び衿つけ線とする。衿丈をはかる。

## 〈衿〉

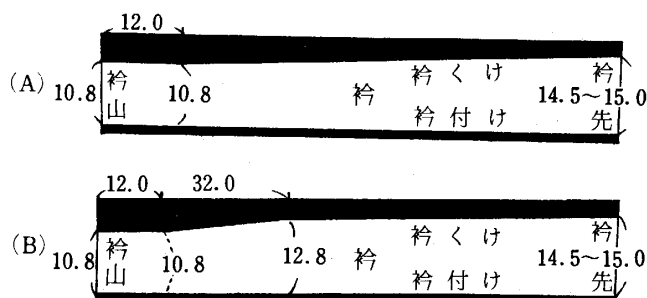
第8図 衿作図



衿布幅は各自実習材料布幅の $\frac{1}{2}$ とする。衿下側ですそ口を直角に切る。すそ口くけ代 2.0 cm ととる。次に衿下をとり衿下くけ代 1.0 cm。衿下くけ代よりすそ口で衿幅(衿幅+衿つけ折きせ代 0.2 cm)をとる。衿下点では合襷幅(合襷幅+衿折きせ代 0.2 cm)を標し衿幅と合襷幅の2点を結び延長してその線上に衿丈をとる。衿丈より剣先の折きせ分 0.3 cm はなれた点と衿下を結んで衿つけ線とする。衿つけ丈をはかる。

## 〈衿〉

第9図 衿作図



衿布幅は衿と同様にする。

ばち衿型Aは衿つけ縫代 1.5 cm ととる。衿幅は衿肩まわり (12.0 cm) 間では衿幅の2倍、折きせ分 0.2 cm を引いた寸法、衿先幅はこのみにより 14.5 cm ~ 15.0 cm とし衿肩

まわり下端点と結んで斜とし衿くけ線とする。

BはAより剣先での衿幅を広くつくるもので肩山より剣先にあたる距離を 32.0 cm とし衿幅を剣先での衿幅 6.5 cm の2倍より折きせ分 0.2 cm 少なくした寸法をとって衿先幅標と結んで衿くけ線とする。

## 1-4) 標つけの時間分析 (1/100 分単位)

## △ 型紙を用いた場合と用いない場合

〔注〕 型紙を用いた場合をA

型紙を用いない場合をB

袖についてみるとAの平均値99, Bの平均値240。従ってBはAの約2.4倍もの時間を要している。危険率1%で有意差検定を行った結果A B間に有意差が認められた。

後身ごろについてみるとAの平均値338, Bの平均値502。即ちBはAの約1.5倍の時間を要している。危険率1%で有意差検定を行なった結果A B間に有意差が認められた。

衿についてみるとAの平均値111, Bの平均値262。即ちBはAの約2.4倍の時間を要している。危険率1%で有意差検定を行った結果A B間に有意差が認められた。

衿についてみるとAの平均値94, Bの平均値145。BはAの約1.5倍の時間を要している。危険率1%で有意差検定を行った結果A B間に有意差が認められた。

以上のことから全体的にみても型紙を用いた方が実際作業量の割合が小さいことが実証できる。

▲標つけの状態をみても正しく標がついている (A……75%・B……10%)

▲標あとがある (A……20%・B……45%)

▲寸法違い (A……なし・B……15%)

▲二度標がついている (A……5%・B……30%)

ここでも型紙を用いた方が失敗が少なく作業能率も大となる。

## 1-5) 小括

- 1 ものさしを使って標つけをするのと異なり自作の型紙を使用することによって構成状況が容易に会得でき関心もわきその上標つけのまちがいが起りにくい。
- 2 標つけそのものの時間が短縮され能率が高い。
- 3 自分の型紙ができたので次の段階として家族の型紙を製作するなど衣生活の合理化に近づこうとする意欲が起ってきたと思われる。

## 1-B) 肩あて・居敷あての工程

## 1-1) 指導書調査結果 (22冊)

二度ぬいの必要性を示したものが全体の14%。

二度ぬいの必要性を示していないものが全体の86%。  
 二度ぬいの範囲を示したものが全体の18%。  
 二度ぬいの範囲を示していないものが全体の82%。  
 肩あてを省くと示してあるものが全体の63%。  
 肩あての二度ぬいのみ示して省くことを示していないものが全体の23%。  
 何も示していないものが全体の14%。  
 居敷あてを省くと示したものが全体の18%。  
 居敷あてを省くと示していないものが全体の23%。  
 何も示していないものが全体の59%。

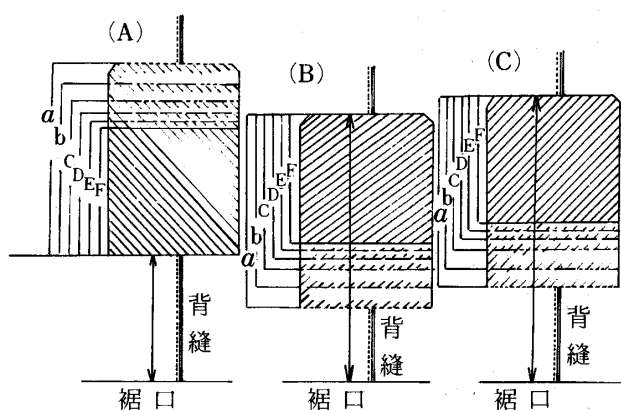
### △背ぬい二度ぬいの理論性

背ぬいの二度ぬいは衣類整理によって起るぬい代の開きをふせぐためのものであることは洗たく実験により明らかである。従って自ら二度ぬいの位置が決定できる。

#### 1-2) 居敷あての大きさと位置の関係

指導書では身長と居敷あて布の大きさに関係なく位置が示されているので人間工学の立場から不合理であると考える。

第10図 居敷あての位置（指導書）



(A) は裾口より40.0cmあがって上につけてある。従ってaのみが体位に適合し b・C・D・E・F は下りぎみとなる。

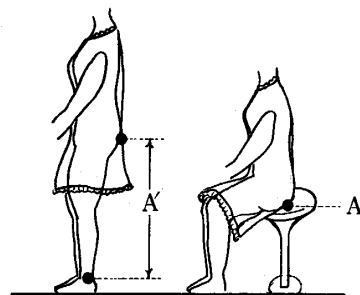
(B) は衿下の位置より下につける。即ち a・b・c・D・E・F いずれの場合も適合性がなく下がりぎみである。

(C) は衿下に5.0cm加えた位置より下につける。即ちFにやや適合性があるだけで a・b・c・D・E は下がりぎみである。

そこで私たちは本学学生の臀高の高さと位置を計測した。(第11図参照)

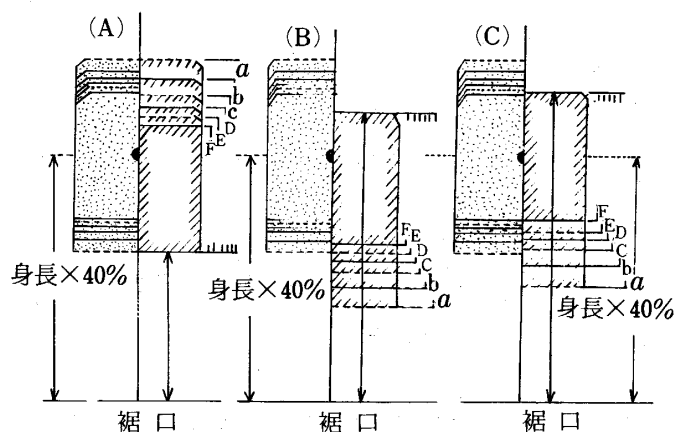
### 第11図 臀高の測定法

A……被験者を平面腰かけに正しくかけさせ臀部と腰かけの接点にものさし3.0cm入れた点を印す。  
 A'……被験者を直立させて接点印と外果点の距離をはかり臀高とする。



従来の方法と臀部位の位置（岡・野津式）につける場合を比較すると次のようになる。

第12図 居敷あての位置（岡・野津式）



岡・野津式では身長40%すそから計って居敷あての中央に位置することに定めた。この方法であれば常に着用者の臀部位に適合して機能的に作図することができる。即ち b・c・D・E・F は下りぎみとなる。〔例(A)〕

以上の実験結果より岡・野津式を用いた方が人間工学の立場からもよいし、理論的にも実証できたと思っている。

### △身長に対する臀高の比率

身長 150.0 cm以下……全体の23%……臀高の高さの平均値37.0cm。

身長 151.0 cm～155.0 cm……全体の35%……臀高の高さの平均値40.5cm。

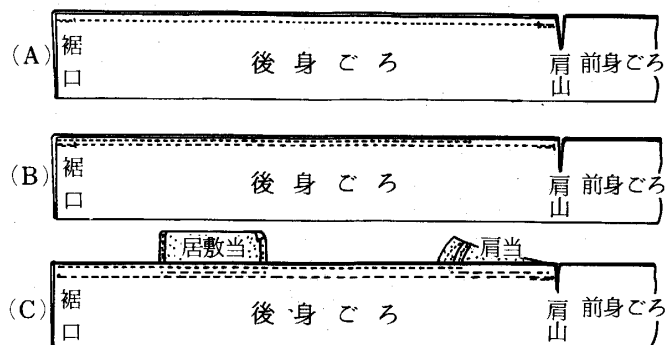
身長 156.0 cm～162.0 cm……全体の42%……臀高の高さの平均値43.0cm。

以上のことから居敷あての位置のめやすとして身長40%と定めてよいと思われる。

### 1-3) 肩あて・居敷あてつけ

#### 第13図 多工程（指導書）

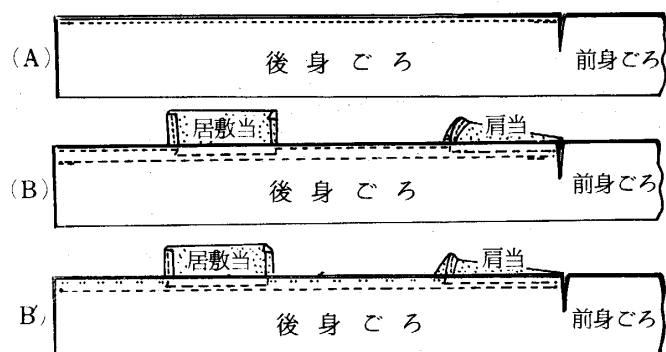
肩あて・居敷あてつけ



(A)は標通り背ぬいをする。(B)の第1工程は背の二度ぬいを行う。この場合肩あてのつく部分は二度ぬいを省くので第2工程として肩あて丈を計測する手順が必要となる。(C)は第3工程で肩あておよび居敷あてを背ぬい目にとじつける。

#### 第14図 単工程（岡・野津式）

肩あて・居敷あてつけ



(A)は標通り背ぬいをする。(B)は肩あて居敷あてつけを1工程で行う。即ち背ぬいの向う側に肩あてをあて、とじつけ居敷あて下端をZ字にとめそのまま背の二度ぬいにつけ、居敷あての位置を定め居敷あて上をS字にとめ下端はZ字どめをしてそれ以下を背の二度ぬいとする。以上1工程で肩あて居敷あてつけを終る。(B')は背二度ぬい部分を耳ぐけの技法を用いて縫代をとじる方法。

ゆかた地の耳には織糸以外の強度な綿糸2本がおりこんであるので縫製が容易でないことはだれしも経験するところである。

### 1-4) 多工程・単工程における時間分析（1/100分単位）

1/100分単位で多工程（第13図）は900、岡・野津式（第

14図B）650、岡・野津式（第14図B'）400である。第13図の方法は第14図Bより1/100分単位で500多い。即ち約2.3倍の時間を要している。第14図Bと比較してみても1/100分単位で250多い。即ち約1.4倍の時間を要している。

以上の実験結果より第14図B'・第14図B・第13図の順位である。

### 1-5) 小括

1 居敷あての位置については着用基体を計測の上で定めるのが人間工学の立場から最も適当であると考え。数値を用いるなら身長の高い者は37%、中位の者は40%、高い者は42%に居敷あての中央を位置させることが理論的・科学的な方法である。

2 背ぬい二度ぬいと肩あて居敷あてつけについては単工程に時間的な効果が認められた。さらに二度ぬいを耳ぐけぬいにするのが能率的であることも解明できる。

従って本学では以上の指導法によりその効果をあげ得ることができたと思っている。

### 1-c) 留

#### 1-1) 指導書調査結果（26冊）

抄い返留が全体の69%。

罫留・虫留が全体の15%。

ささべり4%。

三つ留8%。

瓢箪留4%

### 1-2) 実験結果

#### 1 引裂試験（エレメンドルフ形）

##### Aさき留とあと留の比較

##### A<sub>1</sub> 抄い返留の順位

縫目に対し45度2回巻き490g、縫目に対し90度2回巻き420g、縫目に対し並行2回巻き411g、縫目に対し並行1回巻き401g、縫目に対し45度1回巻き390g、縫目に対し90度1回巻き380gである。

##### A<sub>2</sub> 引抜き留の順位

当布あり引抜き留2本取800g、当布なし引抜き留2本取620g、当布なし引抜き留1本取580g、当布あり1本取500gである。

##### A<sub>3</sub> 虫留・罫留・蝶留の順位

蝶留2本取980g、虫留裏くくり410g、蝶留1本取408g、罫留2本取405g、罫留1本取裏くくり370g、罫留1本取310g、罫留2本取裏くくり300g、虫留210gである。

**B さき留とあと留全体の順位は次の通りである。**

蝶留2本取・当布あり引抜き留2本取・当布なし引抜き留2本取・当布なし引抜き留1本取・当布あり引抜き留1本取・縫目に対し45度2回巻き・縫目に対し90度2回巻き・縫目に対し並行2回巻き・虫留裏くくり・蝶留1本取・罎留2本取・縫目に対し並行1回巻き・縫目に対し45度1回巻き・縫目に対し90度1回巻き・罎留1本取裏くくり・罎留1本取・罎留2本取裏くくり・虫留。

以上のことから抄い返留の平均値415g, 引抜き留の平均値625g, 虫留・罎留・蝶留の平均値422gである。即ち引抜き留が1位次いで虫留・罎留・蝶留, 3位が抄い返留の順位である。あと留の中でも蝶留2本取が一番強度が大であるが特種な技法を要するので今後の課題にしたい。そこで今回はさき留の中で一番強度の大きい当布あり2本取を被服構成学の指導に導入したいと考えている。

**2 引張試験（ショッパー形）****A さき留とあと留の比較****A<sub>1</sub> 抄い返留の順位**

縫目に対し45度2回巻き2.1 kg, 縫目に対し90度2回巻き2.0 kg, 縫目に対し並行2回巻き1.9 kg, 縫目に対し並行1回巻き1.5 kg, 縫目に対し45度1回巻き1.4 kg, 縫目に対し90度1回巻き1.3 kgである。

**A<sub>2</sub> 引抜き留の順位**

当布あり引抜き留2本取2.6 kg, 当布なし引抜き留2本取2.5 kg, 当布なし引抜き留1本取2.4 kg, 当布あり引抜き留1本取2.3 kgである。

**A<sub>3</sub> 虫留・罎留・蝶留の順位**

蝶留2本取2.8 kg, 虫留裏くくり1.8 kg, 蝶留1本取1.7 kg, 罎留2本取1.6 kg, 罎留1本取裏くくり1.2 kg, 罎留1本取1.1 kg, 罎留2本取裏くくり1.0 kg, 虫留1.0 kgである。

**B さき留とあと留全体の順位は次の通りである。**

蝶留2本取・当布あり引抜き留2本取・当布なし引抜き留2本取・当布なし引抜き留1本取・当布あり引抜き留1本取・縫目に対し45度2回巻き・縫目に対し90度2回巻き・縫目に対し並行2回巻き・虫留裏くくり・蝶留1本取・罎留2本取・縫目に対し並行1回巻き・縫目に対し45度1回巻き・縫目に対し90度1回巻き・罎留1本取裏くくり・罎留1本取・罎留2本取裏くくり・虫留。

以上のことから抄い返留の平均値1.7 kg, 引抜き留の平均値2.5 kg, 虫留・罎留・蝶留の平均値1.5 kgである。従って引抜き留が1位・抄い返留が2位・虫留, 罎留,

蝶留が3位である。

引裂試験の結果とほぼ同じ傾向を示している。従って全体で2位の当布あり引抜き留2本取の技法を用いてよいと考える。

留18種についてそれぞれ有意差を1%で検定した結果いずれの場合も有意差が認められた。

**1-3) 小 括**

引抜き留による当布あり2本取を用いると強度が大で仕立上りも官能検査の結果美的であった。他の留と比較してみても造作がたやすい。従って初心者への指導に適応していると考ええる。

さらにこの技法は上地質の仕立てにも活用できる利点がある。

**Ⅲ 総 括**

平面構成の基本である成人用単長着をとりあげ、構成の原理・方法について考察したその結果を要約すると次のようである。

1 初歩の者にとって理解を容易にし、かつ学習の能率を上げるための便法として型紙導入の試みを示した。その型紙を活用して具体的に素材の裁断図式を考案し、裁断してそれを順次組合せて構成へと進める。

要領の把握には紙製模型を試作することによって構成の概要をつかむことができ、学習の効果をあげることができる。

2 居敷あての位置については着用基体の計測値を用いることが大切である。

背ぬい二度ぬいと肩あて居敷あてつけについては単工程を用いるのが効果的である。

3 袖口, 袖つけ, 身やつ口はぬい止りをもった開口部となっている。従って人体の動作や行動により力関係が大きく作用すると考えられる。そこで従来通りの技法では問題があるので簡易で強い実際性をもった引抜き留による当布あり2本取を考えてみた。この技法の実験結果は上述した通り強度が大で造作もたやすく, 仕立上りも美的である。

本論文要旨は、昭和47年6月第15回日本家庭科教育学会（東京）・昭和48年5月第20回日本家政学会中・四国支部（広島）・昭和49年10月第26回日本家政学会（東京）等で発表した。

参 考 文 献

- 1) 岡・野津：型紙導入法……日本家庭科教育学会において講演（1972）
- 2) 岡・野津：肩あて居敷あての工程……日本家政学会中四国支部において講演（1973）
- 3) 岡・野津：留……日本家政学会において講演（1974）
- 4) 米沢光他数名：裁縫精義，東洋図書（1927）
- 5) 岩松マス：和服裁縫前編，雄鶏社（1968）
- 6) 吉村八重野：図解和裁学習書，家政教育社（1962）
- 7) 橋本いち：現代和裁全書，十文字屋書店（1951）
- 8) 吉井ツルエ：吉井式和裁早縫全書，吉井学校（1958）
- 9) 波多江穂野：新和裁全書，祥文社（1968）
- 10) 米沢光他数名：最新裁縫要義，東洋図書（1958）
- 11) 東京家政学院：和服裁縫詳説上，光生館（1953）
- 12) 清水登美：現代和裁全書，金園社（1967）
- 13) 藤田とら：和服裁縫，光文社（1970）
- 14) 稲垣和子他2名：現代の和裁，建帛社（1971）
- 15) 大塚末子：新しい和裁，同文書院（1972）
- 16) 土井幸代：和裁，同文書院（1971）
- 17) 成田順他1名：和裁の研究，同文書院（1971）
- 18) 日本人間工学会衣服部会編：被服と人体，人間と技術社（1972）
- 19) 細野久：私たちの着装，教育図書（1972）
- 20) 坪田歆一：家庭百科大事典7，暁教育図書（1967）

（昭和50年1月4日受理）